

# 万博で輝く「黄金の繭」

## 中部9県パビリオン外装に使用



黄金の繭を手とるカン  
ジェン・ラトゥー・ハイ  
マヌ王妃(右)。左は黒田正  
人さん(ジャコクジャカル  
タ王宮で(山元正樹撮影))

愛・地球博(愛知万博)で飾り物も参加する中部9県パビリオン「中部千年共生村」の外装に、インドネシアに生息する蛾(ガ)の繭を原料にした黄金色のロイヤルシルクが使われている。果樹を食い荒らす害虫だったが、日本の技術協力で地場産業に発展した「黄金の繭」。そのルーツを訪ねてみた。(整理部・山元正)

## ジャワ島のロイヤルシルク

いである。繭を糸にして「害虫」だったが、日本野  
くのはかなり懐疑のいる作 産学会などが一九九四年に  
業。出来上がった野生のシ 「特産品」として生かそう  
ルクは見事な黄金色だっ と、繭の育成事業を始め  
た。

これを男性職人が張り合 ショクジャカルタ王宮は  
わせ、一・四×二・〇の 当時、工場による環境破壊  
シートに加工、一枚を作る や産業の停滞に悩んでい  
のに約二十日かかるとい た。そこで、低所得者の取  
う。万博のパビリオンでは 入向上、環境保全につなが  
これを九十シート使った。 る伝統工芸を育てようと、  
繭の正体は現地に生息す 当初は手探り状態でスター  
る蛾「クリキユラ」。その ト、日本の研究者が農村女  
幼虫は果樹を食い荒らす 性に糸紡ぎ技術を指導し、

# 害虫が特産品に“変身”

## 日本の技術協力 地場産業に発展

山間部では植樹が進められ インドネシアに縁があり、「日本の技術協力によって  
た。 現地で事業に携わってきた 事業はうまくいきました。  
「害虫」から「益虫」へ 東京の一級建築士黒田正人 これからも継続的に農民を  
の発想の転換で繭は生産量 さへふらは「十年たつて採 支援していきたい。万博で  
を伸ばし、現在年間約二ト 算がとれる地場産業に成長 は、ぜひ多くの人に黄金の  
を収穫、日本との懸け橋と した。今後二十年、三十 繭を見てほしい」と希望の  
もいわれるまでになった。 年後を展望し、美しいジャ 訪日を楽しみにしている。



1 地球を巡るといって「熱河」の繭から「ロイヤル」の糸  
000年先の子 高湿度水」や富士のわき が生産される。工芸品や  
どもたちのた 水、お茶の効用、新たな 建材シートなどに加工。  
め、持続可能な 産物などを紹介する。 日本にも輸出している。

モノづくりを提案する中 部9県のパビリオン。長 ら歩路約1時間、ジャワ の平均月収は60万ルピー(約  
久手会場に出展され、静 島中部のショクジャカル 7000円)。事業全体  
回環は「水」をテーマ タに生産する蛾「クリキ には約1000人の雇用  
に、1000年をかけて ユラ」の繭1年間に約2 を輸出しているという。



外装に黄金の繭が使われた「中部千年共生村」一愛知県長久手町の万博長久手会場で

ワの森の再 生を目指し たい」と話 す。

万博に採 用されたの も、自然と の共生によ る持続的な 「社会構築 活動」が認 められたか ら。カンジ エン・ラト ウー・ハイ マヌ王妃も 万博で披露 されること に大願ひで